奈良大学
研究助成概要報告

奈良県下高校生の生涯発達意識に関する実証的研究

ー大学進学意識を中心としてー

高田　利武*
Takata Toshitake

社会学部人間関係学科

奈良県下の公立高等学校4校に在学中の高校生に対して質問紙調査を実施し、調査結果の詳細なる分析の結果、県下高校生の生涯発達意識、就中、青年中期に於ける学校生活や大学進学意識に就いて、大要下の如き結論に達するを得た。

1. 人間関係の重要性

日常生活の満足度、大学進学の目的、悩み事の相談等の質問への回答状況は以下の如くであった。

(1)日常生活で満足している事柄

学校生活（成績や先生）や社会への満足度は極めて低いのと対照的に、身近な人間関係（友人・家族）には大いに満足している。高校生が高校生活から得ている満足感は、勉強やその成果ではなく、友人関係のようである。また、自分の住む社会（大きな世界）には満足していないのに、家庭（小さな社会）には満足している。つまり、高校生が生活の中で満足しているものは身近な「人間関係」だけのようである。

(2)大学進学の目的

大学進学についての考え方では、圧倒的に「友人を増やす（正しくは、いろんな人と知り合いになれる)」が多い。それに比べると、大学進学の本来の目的であるはずの「勉強する（好きな勉強に打ち込める)」や、「自分の自信を増す」や「可能性を増やす（人生の選択肢が増える)」は少ない。

一方、「進路に悩まずに済む」や「取り敢えず」も少ない。このようないわゆる「モラトリアム」のための大学進学志望も意外に少ない。したがって、高校生は存外「目的意識」を持って大学進学を志しているようである。しかし、その主な目的は「友人を増やす」ことにあり、ここでも「人間関係」への志向性が読み取れる。

平成15年9月5日原稿受理　社会学部人間関係学科

(3)悩み事を相談する相手

「進学・就職について迷ったとき」「人間関係にいざこざが起こったとき」「自信をなくして落ち込んだとき」のいずれの領域でも、友人に相談する傾向が目立つ。「進学・就職」を母親に相談する場合以外は、友人が最高の割合を占めている。悩んだときの相談相手、つまり、人生の重要な指針となっているのは主に友人であると言える。

以上を要するに、高校生の存在自体が友人関係なくしてはあり得ないように思われる。極言すれば、友人がいれば人生に満足し、悩みの解決は友人に依存し、友人関係を求めて大学に進学する、というのが高校生の姿のようである。

2. 背景要因としての「相互協調的自己観」

「文化的自己観」とは、ある文化で暗黙に共有されている、「人間や個人とは何か？」についての考え方である。これには、大別して「相互独立的自己観」と「相互協調的自己観」の2つがある。「相互独立的自己観」は、自分は他者から完全に分離した独自な存在として捉えるものであり、「相互協調的自己観」は、他者と互いに結びついた人間関係の一部として自分を捉える考えである。日本を含むアジアの文化では「相互協調的自己観」を持つ者が多く、欧羅巴や北米では「相互独立的自己観」が一般的であるとされる。斯かる自己観の程度と、上述せる諸傾向が如何なる関係を持つかを検討した処、大要下の如くであった。

(1)文化的自己観と高校生の特質

男女とも相互独立性より相互協調性の方が強く、また、前者は男子、後者は女子の方が強い。これは、この尺度を用いてこれまでに報告されている傾向と全く同じである。また、これまでの研究によれば、高校生・大学生の時期は、発達的に見て最も相互協調性が高く、相互独立性の低いことが分かっている。したがって、今回の調査の対象となった高校生は、この時期（青年中期）の特質を遺憾なく代表していると認められ、前節でみた「人間関係」重視の考え方の背景には「相互協調性自己観」があると考えられる。

(2)相互協調性と人間関係への考え方

男女別の平均値に基づいて、①相互協調性の特に高い者、②相互協調性が中程度の者、③相互協調性の特に低い者、の3群に分割すると、前節で見た人間関係への考え方が異なることが分かった。即ち、相互協調性が強いほど「友人を求めて進学」し、「仲間との同調傾向」と「仲間はずれ（逸脱）を恐れる傾向」も高い。また、「友人への満足度」は女子の場合、逆に相互協調性が高いほど相対的に満足度が低くなっている。これは、女子で相互協調性が強い者は、とりわけ相互協調性が高くて友人関係への希求が強く、そのため却って現状に不満を感じているのではないかと思われる。

(3)相互協調性と規範意識・権威主義

相互協調性の強さは、高校生の実態から見ると意外だが、規範意識や権威主義とも関連して

いる。相互協調性の強い者は「授業中におしゃべりすること」や「未成年者がタバコを吸うこと」を悪いと思ったり、「生徒は校則に従うべきだ」と考える程度が強く、規範意識が強いと言える。また、「伝統や風習を重要視しない人は問題を起こす」「社会秩序を守るために法律は厳しいものでなければならない」と考える程度が強く、既存の権威や秩序を重要視する権威主義の傾向が強い。

このように、今回調査した高校生にとって人間関係（特に友人関係）は極めて大きな意味を持っているようであるが、その背景には日本文化に顕著な「相互協調的自己観」が介在していると思われ、さらにそれは規範意識や権威主義とも関係しているようである。

結論として、(1)高校生達にとって身近な人間関係、とりわけ友人関係は極めて重要である、(2)その背景には、日本文化における人間関係への考え方が色濃く反映している、と言えよう。